

[成果情報名] イチゴ‘きらび香’の心止まり親株発生低減方法の開発

[要 約] イチゴ‘きらび香’は次年度親株用の苗に秋冬季に施肥（TN-360mg／株程度）を行うことにより春季定植時に芽数を増加することができ、またその後、心止まり株の発生を軽減することができる。

[キーワード] イチゴ、施肥、緩効性肥料、芽数、心止まり株

[担当] 静岡農林技研・野菜科

[連絡先] 電話 0538-36-1588、電子メール agriyasai@pref.shizuoka.lg.jp

[区分] 野菜・花き（野菜）

[分類] 技術・参考

[背景・ねらい]

イチゴ新品種‘きらび香’は極早生で、多収、良食味であるが、春季に親株を定植する際に心止まり株（図1左）の発生がみられ、また親株定植後にも心止まり株（図1右）が発生することがある。これは植物体内の栄養不足が原因と考えられるため、ここでは秋冬季及び春季の施肥の違いが芽数、心止まり株の発生率、子苗の発生及び成育に及ぼす影響について検討する。

[成果の内容・特徴]

- 1 秋冬季に次年度の親株用苗に施肥を行うことにより、春季定植前（4月上旬時点）に芽数が増加し（図2）、心止まり株の発生を減らすことができる（表1）。
- 2 秋冬季施肥を行うことにより、子苗増殖時親株の芽数が約1芽増加する。また定植後の心止まり株の発生も低減する。春季定植時に施肥量を多くしても芽数は増加せず、また心止まり株発生率は低減しない（表2）。秋冬季に無施肥の場合は、40～50%心止まり株が発生する。
- 3 秋冬季施肥方法は毎月施用、2か月毎施用（TN-360mg／株）を行うと心止まり株発生防止効果が高い。省力的な秋季1回施用（TN-360mg／株）は、無施肥と比較すると心止まり株防止効果があるが毎月施用、2か月毎施用方法より効果はやや劣る（図表略）。
- 4 子苗の発生数は、秋冬季施肥と春季親株定植時施肥量に影響される（表2）。
- 5 春季定植後の初期成育には優れるが、6月頃には差は小さくなる（図表略）。

[成果の活用面・留意点]

- 1 3号ポットで秋冬季を栽培し、7号ポットに親株を定植した結果である。
- 2 秋冬季～春季まで雨よけP0ハウスで無暖房下において栽培を行った結果である。
- 3 ポット培土はキノポット（山土＋バーク、無肥料タイプ）を用いた。

[具体的データ]



図1 親株心止まり株

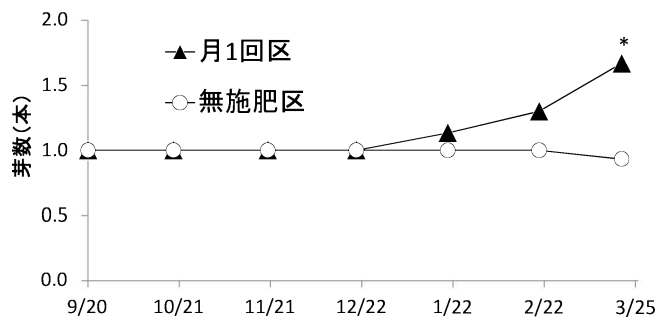


図2 秋冬期施肥が芽数に及ぼす影響

月1回区 9～3月に N-40mg/月/株施肥した。*5%水準で有意差あり

表1 秋冬季施肥方法の違いが春季の心止まり発生率に及ぼす影響

月1回区	0%
前半区	6.6%
後半区	10%
無施肥区	30%

調査日 2013年4月1日

月1回区 9～3月、前半区 9～11月、後半区 1～3月に N-40mg/月/株施肥した。

表2 秋冬季施肥の有無及び春季施肥量の違いがきらび香に及ぼす影響

秋冬季施肥	春季元肥量	心止まり株発生数	芽数 (本)	子苗 (株)	ランナー (本)
	N-(mg)	(発生株数/株数)			
有	700	1/10	3.8	19.6	12.0
	2100	0/10	3.9	31.9	16.8
	4200	0/10	4.2	35.3	17.7
無	700	4/10	2.7	16.5	10.3
	2100	4/10	3.0	22.5	11.5
	4200	5/10	1.4	14.0	8.6
分散分析 ^{Y)}	秋冬季施肥(A)	-	**	**	**
	春季元肥量(B)	-	ns	**	*
	(A)×(B)	-	ns	**	ns

2013年6月25日調査。秋冬季には9月～3月まで N-40mg/月/株施肥した。春季の元肥はエコロング424(140日タイプ)を施用した。子苗は1.5葉以上展開しているものをカウントした。

**1%水準で有意差あり、*5%水準で有意差あり、ns有意差なし

[その他]

研究課題名：静岡イチゴの「作ってよし・売ってよし・買ってよし」新ブランドの創出と産業構造の変革

予算区分：県単

研究期間：2012～2014年度

研究担当者：井狩徹、河田智明、竹内隆、望月麻衣、五藤由香理、大石智広、済木千恵、菊池佑弥